組織

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
組織

【Ｎコード】
Ｎ４３４３Ｂ

【作者名】
絵爾久万

【あらすじ】
仕事帰りの電車の中、目の前の二人の男の会話が耳に入る。「組織…」と言う言葉に惹かれ二人の男の後を追った京本の行き着いたところは、常軌を逸した秘密組織・・・

組織　（1）

通話料お得な『マイライン切り替え』の、テレマのアルバイト（時給１３００円　勤務時間１２：００～２１：００　報奨金あり残業なし　交通費・賞与・退職金・皆勤手当て・福利厚生なし）を終え、帰宅途中の通勤電車の中で、京本は座席に腰掛け、文庫本を読んでいた。

本日８時間ぶっ続けで、喉チンコがちぎれるほど電話を架けまくったが、仮予約１件獲得するのが関の山だった。

毎月貼り出されるハイパフォーマーのランク付け表には、今月も京本の名前は載りそうにない。

と言うか、入社以来２年と７ヶ月、載った事は一度もない。

文庫本の装丁は、毛筆で大きく『葉隠』と描かれている。

三島由紀夫も嘗て愛読していたと言う、この鍋島藩士の指針本は一生掛けても読み解くべきだと、京本は考えていた。

しかし、この本は京本には難しすぎた。難しいにもほどがある。旧漢字が頻出しすぎる。こんな電車の中で流し読みしていたら、一生掛かったって読破できそうにない。

一生掛けても読破できない指針では、この本を読む意味が無い。

しかし、自分は武士でないから、やはり、それはそれでよいのかもしれない。

「組織の幹部には、もう君の意向は伝えたのか？」

「まだだ・・・」

「なら、そんな迷いは即刻唾棄すべきだ。組織の一員となったからには、やはり任務を最後までまっとうすべきではないのか？それと

も君は、そんな中途半端な気持ちで組織の一員になったのかい？」
「そういう訳じゃないが・・・」
「怖気づいたのか？」
「・・・・」
「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり」

一組織・・・　武士道・・・
ムムム、いったい何の組織・・・

目の前に立つ、二人の男の会話が自然と京本の耳に入ってきた。
二人の会話のただならぬ緊迫感が、京本の好奇心を多いにそそった。
視線は本に落としながらも、二人の会話を一語も聞き逃すまいと、京本は聞き耳をたてた。

「後任者を同伴し、後任者が運良く次回のサクリファイスとして選出されれば、後任者と引き換えに脱会できると聞いた」
「そう簡単に見つかるもんか。とにかく、今夜の集会ではまだ口外すべきではないよ」
二人の男は、次の駅で下車した。

今日は金曜日。土日は休みだ。
京本浩二４２才。職業、テレフォンアポインター。
身長１６３センチ。体重７９キロ。脂性、汗っかき。
恋人いない暦２４年。
趣味パソコン。（主にアダルトサイト検索）
独身中年宅男に週休２日は無駄だ。
帰ったところで、する事と言えばいつものように、カリビアンコム女子高生新着もろ出しビデオを見るくらいだ。明日は休みだ。余裕で２・３本くらいヌケるであろう。

隔週日曜日に秋葉のメイド喫茶を訪れるのが、京本の唯一の楽しみだ。
最近は中野へも足を運ぶ。
夕飯は、９９の賞味期限ギリギリの半額になった惣菜や弁当を、毎日一人で食べる。別に寂しいとは思わない。
特別親しい友人もいないし、茨城の高校を卒業し、東京に出てきて以来、夕食はずっと一人であったから、むしろ一人の方が気が楽だ。
長年勤めた印刷工場は、バブルが弾けて間もなくリストラされた。
自分は負け組みだ。人生の半分を既に消費した。これからの人生の予測もつく。学歴も商才も文才もない。若い頃にはあった夢も希望も、反骨精神も
厳しい現実の中で萎えた。
自分は一生、こういう生活を続けて行くのだろうと、京本は思う。
つまらない人生だ。
京本は、そんな凡庸な日常を少しだけ変えてみたくなった。

下車駅は二つ先だったが、京本も二人の後に続いて下車した。
比較的乗降客の多い駅だったので、二人の後を追っても相手に気づかれる心配はまずない。
しかし、人通りの多い街であるから、むしろ見失わないように注意しなくてはならない。
二人は駅前のオフィスビルが乱立する中を足早に抜け、アーケードのある商店街に入った。
商店街は古く、民族調の雑貨屋や衣料品店、薬屋、飲食店などが種々雑多に、延々と続いていた。

二人は一軒の仏具店の前で立ち止まった。
片方の背の高い痩せぎすの男が、一瞬後ろを振り返ったので、京本は急いで帽子屋の麦わら帽子を被り、顔を隠した。幸い男は特段自分を意識している様子ではなかった。
二人の男が仏具店の建物の中に姿を消したので、京本は小走りに仏具屋へ向かった。

店の前に立つ電信柱の陰から中を覗くと、白髪頭の老人がひとり暇そうに店の番をしていた。
店の手前に地下へ通じる階段が伸びていた。
二人は、この階段を下りて行ったに違いない。と京本は直感した。

階段は薄暗く、カーブしていたため、先は見えづらかったが明るさや、広さから想定して、奥に複数の入口があるようには考えられなかった。

ーここまで来たら、下りるっきゃないだろ。
京本は迷わず下りた。階段は思ったより長く感じられた。音を立てずにゆっくりと進んだ。
下の方からドアの開く音が聞こえ、人々のざわめきが伝わってきた。しかし、ドアの軋む音と共に、すぐにまたざわめきは治まった。
二人連れの男が中に入ったのだろうと容易に推測できた。
京本は早足で階段を降りた。

階段を下り切った所で、京本はギョッとして立ち止まった。
てっきり、ドアの中へ入って行ったと思っていた二人連れが、入口の前に立っていたのだ。

「お待ちしておりましたよ」

小太りで頭の禿げかかった男が、飛び切り愛想のいい笑顔を浮かべ、京本に言った。
もう片方の長身の男がドアを開け、中へどうぞと手招きした。
「あの、いや僕はただ…」
京本がドアの前で戸惑っていると、二人は次々に京本に名刺を渡した。
二人の名刺を見て驚いた。
長身の男の名刺には・・・早種田大学政治経済学部教授
永　井　京　平
小太りの男の名刺には・・東京男子医科大学産科学部長
福　田　邦　夫
と書かれていた。
一特権階級の集まりか・・・。
場違いな気もしたが、とりあえず俺は招待されているんだ、入ってみよう。
愛想よく手招きする二人の男に誘導されるように、京本は扉の向こうに足を踏み入れた。

組織　（2）

ドアは二重になっており、奥のもう一枚の扉は、厳重にセキュリティー管理されていた。来客用の名簿に住所、氏名、年齢、職業を記入するよう言われ、京本が年齢を書かずにいると、警備員が「きちんと年齢も入れてください」というので2才ごまかし、４０才と記入した。
別に若く見られたいと言う事ではなく、４０過ぎてもまともな定職もなく、いつまでも派遣社員のままでいる自分に我慢ならなかっ

たのだ。
現社会体制に対する、ささやかな抵抗であった。
書き終わると警備員は疑わしい眼つきで（これは京本が年齢を２才詐称した後ろめたさからくるものであったが）仮のセキュリティーカードを渡してくれ、京本も永井と福田の後からカードスルーを通して中に入ることができた。
飾り気の無い鉄製の扉が、後ろでバタンと大げさな音を立てて閉まった。

扉一枚隔てた反対側の空間には、地上の古い下町の街並みからは、想像もつかないような別世界が拡がっていた。
天井にはクリスタルのシャンデリア、壁にはバロック絵画、金箔が施された彫刻。
一まるで１７世紀のヨーロッパ王朝風の造りのようだ。（因みに京本の海外旅行経験は、高校のときの韓国修学旅行一度のみである）
京本は、ベルサイユ宮殿の中にでも、タイムトリップしてしまったかのような錯覚に捕らわれた。

ホールには重厚な紫檀の長テーブルが５列並んでおり、真紅のビロード張りの椅子が片側１０客、両側２０客ずつ。すでに三席を残し大方席に着いていた。
二人の男と京本が席に着くと、会場は満席になり宴は始まった。
永井と福田は京本を挟むようにして、両側に着席した。

「本日はフランス料理。テーマは『禁断の愛』です。まずは、嘗てランボーとベルレーヌが愛した、エメラルド色の魅惑の毒薬、アブサンで乾杯と行きましょう」
Ｍ．Ｃ．が言った。
「あの・・・トイレに行ってきていいですか？」

京本はなんだか急に帰りたくなり、隣りの福田に申し出た。
福田は京本を見て、笑顔を浮かべながら（しかし、その目は笑ってはいなかった）
「ノン！ノン！まずはアブサンで乾杯をしてからよ」
と言って首を横に振った。
京本は何やら異様な威圧感を感じ、動けなくなった。それは、ジェットコースターに乗る前の、緊張して膀胱が腫れてくるあの感じと同じだった。
目の前に置かれたグラスの縁に、スプーンが橋渡ししてあり、福田はそこに意味深な顔をして角砂糖を一つ置いた。
グラスにエメラルド色の液体を注ぐと、液体は角砂糖に染み込み、そしてグラスの底に落ちていった。
すると永井がポケットからライターを出し、エメラルド色に染まった角砂糖に、火を点けた。スプーンの中で緑色の角砂糖がちりちりと人魂のように青白い炎をあげた。
永井と福田も同じように、アブサンの染みた角砂糖に火を点けた。
周囲を見回すと、その場に居合わせた出席者全員、手に手に青白い炎を上げたグラスを持ち、立ち上がっていた。
「さあ、それでは一気に行きましょう。ア・ヴォートル・サンテ！！」
「ア・ヴォートル・サンテ！！」
M．C．の挨拶で皆はグラスを掲げ、アブサンを一気に飲み干した。
一毒薬を飲んで集団自殺をする組織か・・・。
しかし、どうやらこれから豪華なディナーが始まるらしい。
ディナーを目前にして服毒自殺はないだろう。

京本がグラスを空けずに皆の様子を伺っていると、福田と永井が鋭い目線で、飲み干せと合図したので、仕方なく一気に飲み干した。
グラスが空になると、脇で控えていた給仕がすぐさまやって来て（それはまるでアブサンの椀子蕎麦状態のように）グラスに並々とアブサンを注いだ。
そこへまた、二人の男が両側からグラスを傾けてきて、飲み干せ、と社交的な笑顔で執拗にせまった。
何度も繰り返しているうちに、視界が歪んできた。

「強烈な毒薬を一気に飲み干してしまった。
そこでやって来たお勧めの何と有難い事。
はらわたが焼けただれます。
激しい毒で手足が痺れ、体が曲がり、地べたにぶっ倒れる。
のどが渇いて死にそうだ、息が出来ない！叫ぶにも声が出ない！」
永井はかすれた声で叫び、喉をかきむしり、床に倒れた。

「ふふふ・・・赦しあうのが大事なの。
赦しあってこそ、ふたりは幸せにもなれるの
お互いの身に、たとえ悲しい事件がおきようと
ふたりが泣くだけで、ねえ、乗りきれるもの」
今度は福田が永井に取りすがって言った。

出席者が皆、二人に注目した。

「これは地獄だ。永遠の責め苦だ。ほら、何と、火が燃え盛ることか。
申し分なく焼かれているぜ。ざまあみろ、悪魔め！」

「双生児同様、魂も仲良しのふたりだもの
初心なやさしい気持ちを守って
世間の女たち男たちから遠い所で
不仲の訳なぞさっぱりと忘れ、ふたりの道を続けましょうよ」

「あはははは・・・さっさと失せろ！
女々しい奴だ！どうせお前はあの女の元に戻るのだろう。
戻ったところで相手にされはしないだろうが・・・」

「お願い。あれも、これも、それも、すべて忘れて
今までどおり、おぼっこ遊びを続けましょうよ」

「うるさいっ！黙れ、禿げ！もう一杯！」
ランボーはそう言うと、空のグラスをベルレーヌに突き出した。

「・・・・・・」
ベルレーヌの顔は、怒りのため、次第に真っ赤になっていった。

「あはははは・・・まるでコントだ」

黙って立ち尽くすベルレーヌに、ランボーは笑いながらグラスを投げつけた。
ランボーの言動は、常に若者が持つ背徳的な厭世的な刹那的であった。嘗ては自分にもあったであろうが、いまの自分には決して持ち得ないもの。
透き通るような青い瞳を持つ外見だけではなく、それがベルレーヌを魅了したのだった。
そして、少し前の自分なら笑って済ますことが出来たであろう。
ベルレーヌは、ポケットを探り、拳銃を取り出すと、寝そべって笑い転げるランボー目掛け、トリガーを引いた。

大きな爆発音と共に、銃口から飛び出したものは、トリコロールであった。

会場から笑い声と拍手が湧いた。

立ち上がった永井はその場で福田を抱きしめ、その禿げ上がった額や頬に何度もキスをした。

ーハイソなゲイの組織だったか・・・

京本の目の前で抱き合う、二人の男の訳の解らぬ言葉の羅列は、歪んだ視界と共に、頭の中でぐるぐると回り、次第に意識が遠のいていった。

しかし、普段から会社のオフィス機器洗浄用のエタノールを黙って持ち帰り、晩酌替わりに飲んでいた京本にとっては、それほどの打撃はなく、そんなに長くなる前に気が付くと、眼の前には、豪華に、尚且つ繊細に彩られた料理が並んでいた。

料理長がやってきて、料理の説明を始めた。

「本日の前菜は、カルパッチョ・ドワ・フィユメ、キッシュ・オ・ゾニオン、次に、エスカルゴ・ア・ラ・ブルギニョン、セペ・ア・ラ・プロバンサル。鵞鳥は昨晩葛飾水元公園で仕留めた新鮮な肉を桜のチップで燻製にしました。チーズはエトルキ、ソワニヨン、ロックフォー。こちらはモンゴルより空輸した雌山羊の乳から作りました。それでは、ごゆっくりご堪能下さい」

賞味期限ギリギリの、９９ｓｈｏｐのいなり寿司や、焼き鳥、鯖の味噌煮缶ばかり食べていた京本にとって、眼の前に並べられた芸術品とも言える料理は、どれもこれもすべて未だ嘗て口にしたこと

のない、未知の味わいだった。アブサンで弛緩した舌が、痙攣をし始めた。

―これが禁断の味か・・・

京本は思った。

組織　（3）

二人はまた京本の両隣の席に戻ってきた。

「素敵だったわよ。あたしのランボーさま」

福田は京本ごしに、永井のあご鬚を撫でながら言った。

その指の動きは、顔つきとは対照的に女性のようにしなやかだった。

「君のベルレーヌも真に迫っていたよ。まあ、容貌までそっくりだからな」

「あなたは私のこの容貌を愛しているの？それとも私のこの魂？」

「どちらともいえないなあ・・・」

「あら、いやだ！じゃあ、あたしの事愛してないっていうの？」

「ははは・・・選択肢は2つだけか。うーむ・・・」

永井は腕組みをし、天井を眺め眼を瞑った。

真ん中に挟まれた京本はいても立ってもいられなくなった。

「席を変わりましょうか？」

「だめだめ！あなたはそこにいてくれないと」

福田が言った。

自分が二人の間にいることで、何かしら役にたっているなら仕方がない。京本は思った。

暫くすると、また料理長がやって来た。

「それでは、いよいよ本日のメインディッシュにまいりましょう。本日のメニューはブッフブルギニョン・ヒュメイン・エスカロップ・ドゥ・ボー・パネ・ルラード
アンディーブ・オ・ジャンボン・トルネード・オ・ポワーブルヴェール・プレ・オ・エ・オ・シャンピニョン・ポピエット・オガンズ
そして、デザートはキャトキャール・オ・ポンム、タルト・オ・フレーズ、パヴェ・オ・ショコラ　、フォンダン・ア・オランジェ、クイニー
アマン　ジェル・ドゥ・サング・アヴェス・セリス。ゆっくりとご堪能ください」

愛し合う男女が戯れるように、たわいなくふざけ合っていた福田と永井が、突然神妙な顔つきになった。
会場に異様な低いざわめきが起こった。いったいこれから何が起きるのだろうか。京本は周囲を注意深く見守った。
しかし、特別なことは何も起こらず、給仕が料理を運び、皆それぞれに運ばれた料理を食べ始めた。
黙々と食べ始めた。それまでざわついていた会場内は異様なほど、静まりかえり、食器の音だけが鳴り響いた。誰一人、会話をするものはいなかった。

ラーメン、鯛焼き、メロンパン・・・そんな食べ物は行列ができやすいものです。
行列が行列を呼ぶ。一時間待って食べたラーメン。二時間待って、寸前で品切れになった鯛焼き。三日間徹夜して買ったメロンパン、帰りに雨垂れの中で転んで、落としてしまったの・・・ああ、あの悔しさったらありゃしない。
そんな経験は、誰もが身に覚えのあることでしょう。
しかし、それらにそんな価値があるのかどうか、前頭葉が活発に

活動しているまともな神経の持ち主であれば、それを食べた瞬間に気づくことでしょう。
ラーメンはラーメン。鯛焼きは鯛焼き。メロンパンはメロンパン。それらは、それ以下でも以上でもないって事に。

しかし、このベルサイユ宮殿の中ではそんな公式は通用しなかった。
本当に美味しいものを食べたとき、人は無口になるものです。言葉など出てこないでしょう。そんなことはないと否定される方もいらっしゃるかもしれませんが、それは本当に本当の美味しいものをまだ食べたことがないからであろう。
つまり、悲しいことですが、本当に美味しくないものを、本当に美味しいものだと錯覚しているだけなのです。

しかし、今宵のメインディッシュ、ブッフブルギニョン・ヒュメイン・エスカロップ・ドゥ・ボー・パネ・ルラード
アンディーブ・オ・ジャンボン・トルネード・オ・ポワーブルヴェール・プレ・オ・エ・オ・シャンピニョン・ポピエット・オガンズは、違った。

とろけるように柔らかく、尚且つ弾力のあるほんのりと甘い瑞々しい肉が、アースカラーのはしばみの木の下ソースと絡み合い、ナイスなコラボレーションを醸し出し、咀嚼し、嚥下したその場ですぐに、自分の身体の内部に溶け込んでいく。身体に不必要な成分は微塵も入っていない、そんな感覚だ。
嚥下するたびに舌の奥から咽頭にかけて痙攣していく。その痙攣が食道、胃、十二指腸、小腸を伝って脳を刺激する。
まるでそれは、ダイジェスティブ・オーガズムであった。しかも嚥下の度に感じられるマルチ型だ。
余計なことは何も考える必要はなかった。考えられなかった。

会場の出席者全員の瞳孔は恍惚化し、ホールには、荒い息遣いと嚥下音だけが響き渡った。

「組織に参加しませんか？」

食後のけだるい虚脱感の中で、永井が京本に言った。
正面からまじまじと見た永井の顔は、彫りが深く、あご髭を生やし、まるでギリシャ彫刻のようであった。

ーランボーという人はこういう面立ちだったに違いない。
そんな、ばかな・・・。いけない！そんな自分が己の中に存在していたなんて。
否！ありえない。
自分は、この場の雰囲気と酒と料理に酔っているに違いない。
自分の向かうべき方向は秋葉だ！メイドだ！女高生のパンチラだ！
ありえない！　ありえない！
ありえない！

否定しつつも、京本の心は動揺した。

「入会金は1千万。しかし、今回は肩代わりします。半年に一回こうして集まり、こういうことをします」

確か数時間前、電車の中で、二人の男のうちどちらかが、脱会したいと言っていた。この男だったのだ。

永井の瞳は潤っていた。

包容力のある穏やかで、知的な笑みを浮かべていた。優秀な大学の教授だ。
エリートだ。おそらく同年代であろうが、自分の住む世界とはまったく違う世界で生きてきた人間だ。
自分はこういう類の人間とは、これまでに一度も接触してこなかったであろう。

―この男の瞳は男の癖に、男を魅了し、吸い込んでしまいそうな美しい瞳をしている。

「はい」

京本は素直に頷いていた。

組織　（４）

食事が終わると、生バンドの演奏が始まった。
乗りのいいＭＣが現れ、ダンスミュージックに合わせて腰を振り始めた。

次に、ナイスなボディーの黒人ふたご娘が現れた。黒人ふたご娘は、超ミニのノースリーブのワンピースを着て、髪はブロンドに染め、ゆるやかにカールさせていた。
白人のヘアスタイルを真似ているのだろうが、艶のないブロンド色が、尚更顔の黒さを引き立てていた。ふたご娘は、唄を歌い始めた。

ベイビィラーヴ　ベイビィラーヴ　ベイビィベイビィラーヴ♪♪
ベイビィラーヴ　ベイビィラーヴ　ベイビィベイビィラーヴ♪♪

それはあたかも、７０年代のニューオリンズの、ソウルフルなダ

ンスバーを彷彿とさせた。
ベースの音が体の芯にズンズン伝わると、つい今しがたの、フランスの抒情詩風エロティック、且つ、ネクロマンティックでインサニティ的なディナータイムが、一瞬にしてかき消されてしまった。

「オーケーイ！ナーウ、エブリバディー！
それでは恒例のロッテリー・タァーイム！！・・・イェイ！！！！」
歌が終わると、MCが大きな声を張り上げて言った。
場内はどよめき、異様な興奮が巻き起こった。着席していた人々が次々と立ち上がり、ステージへと歩き出した。

「いったいこれから何が始まるのですか？」
「くじ引きよ」
「くじ引きぃ？・・・」
「それでは私たちも参りましょう」
福田は京本の腕を掴み席を立った。後ろからは永井も付いてきた。しかし、この二人もまた、非常に興奮していた。
京本の手をつかむ福田の手は、汗ばんで微妙に震えていたし。永井の穏やかな顔にも、笑みは浮かんでいなかった。
前後を歩く二人の男に対して、何かすでに不思議な仲間意識のような感情が沸きはじめていた。

「賞品は何なんですか？」
会場のざわめきと緊張のせいで、京本の質問が聞こえなかったのか、福田はちょとだけ後ろを振り返ったが、何も答えず、すぐにまた前を向いてしまった。
たかが、くじ引きに・・・。
京本は不思議でならなかった。

一入会金一千万を、簡単に支払えるくらいだ。その他にも会費があるだろう。
今日此処に集まっている人間は、社会的にもおそらく少数の、いい地位にいる人間ばかりが揃っているに違いない。
賞金は億単位に違いない。しかし、その資金源は、いったいどこから・・・。
たった百人そこらの人数で、年に二回そんなに多額の賞金を支払えるはずもない。
それは、京本でも容易に想像できた。なにか闇の組織との繋がりがあるに違いない。そうだ。きっと、そうに違いない。

などと、あれや、これや考えているうちに、京本はくじ引き台の前に立っていた。
くじ引きは、年末、年始、若しくはお盆シーズンの、商店街のあの素朴な円形のやつで、取っ手を掴み、一回ぐるっと回すそれだった。
それは素朴すぎて、この中世王朝時代の宮殿を思わせる内部構造とは、あまりにも、かけ離れていた。
しかし、むしろそれは京本にとっては好都合で、馴染み深く、回しやすかった。
小学校のとき、水戸銀座商店街の二等の賞品だった、ギアー付き自転車が欲しくて、よくくじ引きを回しに行ったものだ。もちろん、京本の家は貧しく、そうしょっちゅう抽選券が貰えるような買い物をするはずもなく、京本は商店街のごみ箱をあさったり、くじ引きに興味のなさそうな人を見つけて値だったり、死に者狂いで補助券を集めては、福引をしたものだった。
結局、当たりはしなかったが、あの時の情熱が今この場で燃え盛っている。今の自分にあるかと言えば、今はない。

周囲の異様な興奮度とは、対照的に京本はあまり緊張もせず、熟

練した手つきで回した。

受け皿の上に、ポロンと白玉がひとつ落ちた。

どうせそんなところだ。

この天から見放されたような、なんの取り得も、くじ運もない男に、数億円の賞金が当たるはずもない。京本は、ちょっとだけ期待を抱いてしっまた自分がいた事を、速やかに悔いた。

そのまま、その場を立ち去ろうとした時

「その玉は持ち帰るのよ。大事な玉だから、落としちゃだめよ」

福田が、自分の玉をしっかり握り締めて言った。

「これは、金玉、銀玉、赤玉が出て、その場ですぐに結果が判るというものではないの。中に数字が書かれている紙が入っているから、なくさないでね。当たりは、後で厳正に出席者全員の前で選出されるのよ」

一なんだ・・・。京本は、速やかに悔いた自分を悔いた。

永井がくじを引き終わるのを待って、三人は席に戻った。

元の席に着き、小さな玉を見るとそれは蓋がついていて、二つに割れるようになっていた。蓋を開け、中から紙を取り出し広げてみると、二桁の数字が書かれていた。

両側に座る、ふたりの様子は尋常ではなかった。福田は広い額から脂汗を流し、祈るような姿勢をしている。永井は腕を組み、眼を瞑りじっと固まっていた。

全員がくじを引き終わると、ステージの上に弓矢と的が運ばれた。

的は回転式になっており、１から０まで１０個の数字が書かれていた。

ドラムとシンバルの音が鳴り響き、ＭＣが言った。

「アーユーレイディー？！」

「オーケーイ！！」

黒人のふたご娘が同時に返事をした。

「ゴーッ！！」

ふたごの片割れの、右の唇の脇にほくろのある方が、まず矢を引いた。

会場は波を打ったように静まり返った。

放った矢は９に当たった。

大声を出し喚起して叫ぶ者、落胆のため息を漏らす者、罵声を放つ者、場内壮絶な雰囲気となった。

「ナーウ　ネクスト・・・アーユーレイディー？！」

「イエップ！」

「ゴーッ！！」

今度はもう一方の、ほくろのない方の黒人娘が矢を放った。

また９に当たった。

大きなどよめきが渦をまき、百万の怒号のトルネードとなり、天井を突き破るかのごとく、会場全体を揺さぶった。

京本は自分の紙に眼を落とし、記憶していた番号をもう一度確認した。

「”９９”
・・・当たりだ」
京本は独り言のように呟いた。

それを聞き逃すまいと、京本の様子を窺っていた福田が、すぐさま京本の紙を横取りし、番号を確認した。

「イエスッ！！イエス！！イエス！イエス！イエーーースッ！！！」
福田は大声を揚げ、短い右腕を何度も高く揚げ、ガッツポーズをした。
会場内の参加者の視線が、すべて福田と京本に集中した。
福田は京本を抱き締め、何度もキスをした。

訳のわからないまま、左隣りをみると、永井は腕を組んだまま、黙り込んでいた。

組織　（５）

「賞金は５千万円。入会金の１千万は今回私が肩代わりするわ。っていうか、お友達の紹介は入会金免除なの。只今キャンペーン中なのでね。ま、そうした方がお得なわけだから、あたしのことお友達じゃないと思っても、便宜上のことだからあまり気にしないでね。只今お友達紹介キャンペーン中だから入会すると、マグカップがもれなくついてまぁーす。はい、どうぞ！」
「あ、はい・・・ありがとうございます」
京本は軽く頭を数回下げた。
剥げ頭の小太りの中年男が、アイドルのような仕草で、目の前に差し出した小さな箱を見て、即座にこれは札束ではないなと判断した。

当選した京本は会場の大きな拍手に見守られ、その場ですぐに福田と2人で別室に移動した。
そこで待っていた、別のもうひとりの組織員と福田に入会の意思を再確認され、入会の説明を受けていた。

「それから年会費の1千万円は一括前納となりますが、賞金から差し引かせてもらってよろしいでしょうか。それとも、別にお支払いになりますか？」
「あ、いえ、差し引いてください」
そんな大金払えるはずもなかった。京本よりはるかに若い組織員の、自分を見下したような態度が、少しムッとしたが、見下されるのは子供の頃から慣れている。
京本はまた、何度も頭を下げた。

「それじゃあ、こちらの4千万が今回あなたの持ち帰れる賞金という事になります」
ジュラルミンケースから札束が取り出され、京本の眼の前に次々と無造作に置かれた。
生まれて始めて見る、むき出しの大量の札束だった。１００万で括られた束が４０束あった。
信じられなかった。
受領書にサインをしながらも、それはまるで夢でもみているよう気分だった。できる事ならほっぺたをつねりたいところだった。が、京本は大人だったのでしなかった。
年収２００万余りの低所得者が稼ぐ、約２０年分の金額だ。京本にとっては考えられないほどの大金だ。ほっぺたをつねる代わりに、京本はどんぐり眼をぱちぱちさせた。

「何か入れ物が必要なら用意しますが・・・」

「あ、いえ。このバッグがありますから」
札束の量から、京本は通勤でいつも使っている秋葉のディスカウントショップで、９８０円で買ったバックパックに、充分に入ると推察した。
中にはペットボトルの飲み残しとフェイスタオル（多汗症のため）街頭でもらったティッシュ、葉隠、割り箸・・・そんなものしか入っていない。かさばるペットボトルは、残りを飲んで捨てればいい。

「福田さん。基本方針、コンプラ関係はすべて話してありますよねえ」
組織員が言った。
「え、ええ、もちろんよ」
福田は間髪入れずに答えた。
「私達の組織は信頼関係の上に成り立っていますので、あなたの言葉を信じます。では、私はここまでということで、次がありますので失礼します」
「はいはい。あとは私におまかせください」

部屋を出て行く男の後ろ姿に手を振って、福田は額に浮いた玉のような汗を拭った。
「６ヶ月後にまた、今日のような催しがあるの。今回あなたの受けた賞の他にも５名の会員が選ばれているわ。特賞のあなたを含めて６人で次回の晩餐会を開催してもらうので、企画や準備やらで一月前には集合がかかるから、そういったミーティングには参加できるわね。お金を使い切って、はいさようならってことは出来ないけど、それは大丈夫よね」
札束を眼の前にして、福田は言った。
「とんでもないです。できます、できます、できますとも」
京本は頭を何度も、卑屈に下げて言った。

「私は、あなたと入れ違いに脱会することになりますので、あなたとお会いするのも多分今日が最後だと思うわ」
「えっ？・・・脱会するのは永井さんの方ではなかったのですか？」
「誰が言ったのそんな事・・・」
「あ、いえ、俺の勘違いです」
「そう・・・。なら、いいんだけど。私は脱会の手続きがあるから、あなた先に帰っていいわよ。晩餐会は既にお開きになってるからね。そのお金、落とさないように気をつけてね。半年間思う存分楽しむのよ。使い切っちゃていいんだから。墓場にお金は持ってけないからね」
福田は一方的にそれだけ言うと、早々に部屋を出て行った。

ひとり取り残された京本は、目の前に積まれた札束を暫く眺めていた。それからいくつかを手にし、ゆっくりバラバラと札を捲ってみた。すべて本物の１万円札だった。
４千枚の１万円札は、思ったほど重たくはなかった。
京本はバックパックのジッパーを開け、今度は機敏な動作でテーブルの上に置かれた札束を次々とバッグに詰め始めた。中に入っていた飲み残しのペットボトルのお茶は一気に飲み、後で捨てようと思った。

仏具屋の脇の階段を上がり外へ出ると、あたりはすっかり暗くなり、人通りもまばらになっていた。電信柱の影に黒い人影が・・・。
近づいてみると、永井が立っていた。
「入会の手続きは終わりましたか？」
永井は穏やかな笑顔を浮かべて言った。
「ええ、すべて終わりました」

「それでは一緒に帰りましょうか・・・」

ふたりは肩を並べて駅の方向へ歩いて行った。永井の家は京本の下りる駅の3つ先だと言う。ふたりは同じ電車に乗り込み、隣同士に座った。

終電間際の週末の電車の中は、酔っ払いの客が殆どだった。

「私も次回の実行委員に決まりました」

「5人の中のひとりですか？」

「はい・・・」

「賞金は？」

京本がそう質問すると、永井は京本の顔を覗き込むようにじっと眺めた。

間近で見られたので京本はどぎまきした。

「賞金は特賞だけです。残りの5名は実行委員として選出されるだけなんです。実行委員は1ヶ月前から次の晩餐会の準備をする。それだけです」

「はぁ・・・それだけ」

しかし、京本は気になっていた。

一組織の目的はいったい何なのか。豪華なフルコースディナーを食べ、くじ引きをする。そのために何千万もの会費を払う。本当にそれだけなのだろうか・・・。

京本は思い切って聞いてみた。

「組織の目的はなんなのでしょうか」

「目的？」

「ええ、目的」

永井はまた眼を大きく見開いて京本を見た。そして言った。

「聞いてなかったんですか？」
「ええ」
「そんな、ばかな・・・」
永井は腕を組み、顔を上げて眼を閉じた。
永井の癖だ。京本は思った。

気が付くと、電車は京本の下車駅に入っていた。
「とりあえず、私は降ります！また、連絡します」
京本は永井に言葉を投げかけ、急いで電車を降りた。

湿気の多い、蒸し暑い晩だった。
長い一日だった。京本は大きくため息をひとつつき、改札へつながる階段を昇った。

「京本さん・・・」
後ろから名前を呼ばれ、振り返ると永井が立っていた。

「今晩、お宅にお邪魔してもよろしいですか？京本さん」
永井は言った。
「えっ？」
「ご都合悪いのならいいんです。お見かけしたところ、ひとりでお暮らしの様に見えたので・・・」
「ええ、まあ、ひとりですけど」
ひとりだが、１０年以上住んでいる今のアパートへ、人を招き入れた事などない。
男のひとり暮らしだが、きれい好きなので部屋の中の掃除は行き届いている。
ゴミはきちんと分別している。洗った食器はタオルで拭かず自然乾燥だ。タオルの雑菌が食器に付くのがいやなのだ。台拭きは毎日滅菌漂白している。布団は毎日たたむ。気になるのは臭いだ。

東向きの1階なので日当たりが悪く、洗濯物も乾き辛い。黴が生えやすく、油断すると、アンダーウェアーやタオルが納豆臭くなる。
今から来たところで、帰りは終電には間に合わない。泊まる事になるのだろうか。布団はひとつしかない。あの汗臭い布団に、いい大人の男がふたりして、肩を並べて寝るというのだろうか。
だいいちこの男は、寝巻きを持ってきているのだろうか？
持って来ていなければ貸さねばなるまい。
しかし、この男が着れそうな白く清潔で、上等な材質のアンダーウェアーなどは、箪笥の中をひっくり返しても出でくるわけはない。
雑菌が繊維に絡みつき、納豆臭くなったパンツとシャツは着せられないであろう。
そうだ！押入れの中に新しいやつがあった。しかし、それは先週通販で買った、萌え系の女子中学生の体操着の上下だ。紺と白だから、パジャマだと言ってだせばバレやしない。いや、バレるだろう。しかも、Sサイズだ・・・。この男には無理に決まってる。
だいたいからして、歯ブラシだってありゃしないんだ。

「さっきの話の続きを話しておきたいと思って。あ、いえ。都合が悪いなら、また別の日にでも致しましょう。では・・・」
右手を揚げ、立ち去ろうとする永井に京本は言った。

「あっ！どうぞ。本日お願いします。明日は休みです」

組織　（6）

ドアを開けるなり、普段はまったく気にしていなかった、異様な発酵臭が鼻を突いた。
京本はいち早く窓際へ駆け寄り、窓を開けた。
4千枚の札束が入ったバッグパックは部屋の隅に無造作に置いた。
「一人住まいなもんで・・・いやぁ、ははは」

永井は気にとめる風でもなく、ただ黙っていた。

「お茶でも入れます」

「いえ、結構です。かまわないでください」

狭い6畳間の真ん中に配置された小さな座卓に、男がふたり膝を付け合せて座った。京本は間が持てず、冷蔵庫の中から水出し麦茶を出し、グラスに注いで差し出した。

永井は、それにはまったく手をふれずに言った。

「布団を敷いてくれませんか？」

京本が呆気にとられていると・・・

「横になりたいんです」

更に永井は言った。

汗の滲んだ布団は、他人の目の前になど晒せるものではなかった。様々な染みが付き、黴で変色していた。

しかし、大学教授とテレマの派遣社員という社会的な立場の違いのせいなのか、この男の言う事には厳然とした重みがあって、京本は逆らう事はできなかった。

「わかりました」

京本は素直に、永井の前に布団を敷いた。

「灯りを消してください」

「えっ？」

「灯りを・・・」

「あ、はい」

京本は言われるままに、蛍光灯の灯りを消した。

部屋の中は真っ暗になった。
数時間前に出会った見知らぬ男が、自分の汗や脂の染み込んだ薄汚い布団を挟んで、すぐ目の前に座っている。
この状況をどういうふうに捉えたらいいのか、京本にはまだ現実として実感が湧かなかった。

暗闇に目が慣れると、しだいに月灯りで青白く照らされた部屋が、浮かび上がってきた。ふたりは黙ったまま、じっと座っていた。

コオロギの鳴き声が沈黙を破った。

「秋ですね・・・」
永井はそう言って布団の上に横たわった。
黙って座り込む京本に、永井は更に言った。

「あなたも横になった方がいい」
京本は言われるままに、永井の横に寄り添うように仰向けに寝そべった。なぜか緊張し身体がこわばった。

「リラックスして」
京本の緊張を解きほぐすように、永井は穏やかな声で囁いた。
「・・・・・」

「眼を閉じてみてください。目の前に無限の宇宙が拡がってきますよ。
ほら、夜空には三千と星が輝いている。なんと幻想的なんだ・・・」
永井の言葉の通り眼を閉じると、目の前に夜空が拡がり、星が輝き始めた。

永井の宇宙と、京本の宇宙は決して混じりあう事はなかったが、二人は隣り合い、同時に同じ星空を見ていた。
そこには学歴や社会的な地位、年齢、性別、貧富の差は最早存在しなかった。広大な宇宙の中に漂うふたつの塵。

「あなたはいったい何のために生きているんですか？」
「えっ？」
突然投げかけられた、永井のあまりにも漠然とした質問に、京本は上手い答えがすぐには思い浮かばなかった。

「何のためって・・・、別に何のためでもないです。自分の意志とは無関係に自分が存在している訳ですから。ただ此処にこの肉体があるから、本能のまま喰って、寝て、出す。そんだけですよ」
思いのままを言葉にし、京本はあらためて自分の虚しさを再確認した。

「あなたには理解してもらえると思ったんです。直感ですけどね・・・」
「はぁ？・・・」
「私と同じ匂いを感じたんです。あなたが私達の後をつけて来たことは、わかりました。つけてくるような気がしました」
「えっ・・・・」
「わかりますよ。今あなたの考えている事も」
「・・・・・」
「何かで脅され続けてていないと充実した生き方ができないんだ。だから組織に自ら入った」
京本には永井が何を言おうとしているのか、まったく理解できなかった。

「私達の組織の本当の目的は、カニバルです」
「カニバル？・・・」
「人肉を喰らう組織です」
「人肉？」
「最高の贅沢でしょう。医食同源という言葉がありますが、その意味は医も食も源は同じ。食べて直す。臓器の色と同じ色の食物は臓器に効く。肝臓には肝臓、腎臓には腎臓、自分の臓器の色、構造により近い物質を摂取すれば病気は癒えると考えられています。豚でも牛でも鶏でもなく人肉。加えて自分の肉体が要求するものは、自然と舌が旨いと反応する。最高の贅沢ですよ」
「そ、そんな・・・」
「あなたが今日食べた人は田亀ミレイ。ロシア人とのハーフです。もちろん調理人の腕もあるのでしょうが、ソテーされた二の腕はハシバミソースと絶妙にマッチして最高に美味だった。若い女性の肉の弾力はやはり素晴らしい。胸肉の柔らかさは、まるで咽頭を綿毛で愛撫されているようだった。脳漿入りポアレは舌が溶けそうだった。カシスと血液のシャーベットも最高だった。彼女は元ハリウッド女優。ヴッコロスキー原作の『冷たい月』にも出演してますよ。死姦される役だった。浮浪者同然の男に犯される時の、瞳孔の開いた感情のない瞳がとても美しかった。死体の役をやらせたら、右に出るものはいないだろう。ああ、あの美しい肉体の一部が私の身体の中に入り、血液や肉に同化していくかと思うと、今でも身体中が痺れます」

京本の宇宙の中で、星々が弾けて散った。

「サクリファイスとして次の順番が回ってくるまで、私達は大罪を犯し続けなければならない。罪悪感に苛まれながらも、甘美な快楽に陶酔し、間違いなくやって来る処刑の日を待つ。それが、どれだけ生を強く感じさせることか。どれだけ充実して日々をおくれるこ

とか・・・。意識せず生きている人間には解りますまい。私も嘗てはあなたと同じだった。生きてはいても、死んだような日々を無意味に送っていた。組織に入ってから世界が一変した。青空を美しいと思い、夜空の星を眺めては感動し、四季折々に咲く花を見ては心を弾ませた・・・」
「サクリファイスとは？・・・」
「生け贄・・・」
「いけにえ？」
「次の晩餐会で調理される素材になる事。サクリファイスは毎回、晩餐会の後で行われる公正なくじ引きで選出されるのです」
「くじ引き？」
「特賞を引いたひとが次回のサクリファイスとなり、組織のために自ら身を捧げるのです」
「特賞？・・・」
「はい」
「俺の取った特賞？」
「そうです」
「俺が生け贄？」
「そう・・・」
「そ、そんな馬鹿な・・・。そんな。俺が喰われるってことか？馬鹿な、そんな馬鹿な。そんな馬鹿な。俺が喰われるって事かよー！はははは・・・はは、はははは・・・。うそだろ？大体からしてあんな多額の現金を手にしたのだってうそ臭い。夢だ、夢に違いない。これは悪夢だ！俺みたいにくじ運のない人間にあんな大金が当たるはずもない。今日の出来事は全て夢なんだ。そうに違いない・・・」
京本は両手で顔を覆い、暗闇の中で記憶を打ち消そうと必死にもがいた。
隣で荒い息遣いを感じた。右手を伸ばし手探りで輪郭を捕らえ、

顔を左に向き直した。
永井だ。永井が穏やかな顔で自分を見つめている。夢ではなかった。
永井は京本の右手を掴み、そして言った。
「なにも怖がる事はないんだよ。」

京本は掴まれた手を力強く握り返した。そして突然、身体の中から湧き出す、これまでに感じたことのない激しい衝動に駆られた。
京本は、着ていたものをすべて脱ぎ捨てた。
永井も同じ動作をした。
ふたりは狭い部屋の、薄汚い布団の上で、生まれたままの姿に戻った。

それから、ふたりはお互いがお互いの身体を一体化させるかの如く、皮膚や舌、粘膜質の表面を、できうる限り密着させた。
溜まっていた水が一気に流れるかのように、ふたりはお互いの身体を本能の赴くままにむさぼり合った。
まるで、野獣のように・・・。
組織　（7）

紅いフェルトのペン先が、ひんやりと喉元に触れた。
喉仏の下から、みぞおちを通り、臍、恥骨まで、一気に紅い直線がひかれていく・・・。

…これは天然素材を使ったマーカーですから、人体には無害です。
それから、首や腕、脚は詰め物をした後、凧糸で結びますので、縫いしろの部分3センチほど残して、ぐるっとマーカーを入れていきます。
今回のテーマは『　究極の韓国宮廷料理！！！』
朝鮮の宮中料理は、韓国伝統料理の最高峰と言われるものです。

朝鮮時代の宮中料理は、韓国の各地方から献上された最高の食材が使われ、国で最高の料理人を集めて作られていました。
宮中料理はまさに『究極』の2文字にふさわしい味です。
本日のメインディッシュは宮廷料理の定番、参鶏湯（サムゲタン）です。
マシソヨー！！
通常、鶏肉はまるのまま使います。
内臓を取り出した後、丁寧に腹腔を洗い流します。その時、取り出した内臓も、もちろん他の料理で使いますので、傷をつけないよう充分注意して取り出しましょう。
きれいに取り出したところで、次に、腹腔にもち米と一緒に高麗人参やナツメ・ニンニク・松の実・栗などを詰めていきます。
あとは長時間グツグツと煮込んでいくだけです。シンプルな料理だけに、素材の良し悪しがたいへん重要になってきます。
それでは、まず最初に肉からさばいてまいりましょう。
出来上がりも美しくなくてはいけないので、先ほどマーカーで印をつけた紅い線の上をなぞるように丁寧に包丁を入れていきます。

一通り説明が終わると、永井は真剣を抜くような大げさな素振りで、白衣のポケットの中から包丁を取り出し、高く掲げた。
出刃を電灯の光にかざし、丹念に刃こぼれがないか確かめていく。
その瞳は狂喜に潤い、唇の端からは粘着性の液体が流れ落ちた。

そして、刀は振り下ろされた。

冷たい刃先が京本の喉元にいったん触れると、頭から爪先まで、全身の体毛が総立ちになり、身体中のすべての器官が硬直した。
喉仏の下から、刃先が身体の上をなめらかに滑っていく。
みぞおちを通り、臍、恥骨まで、ゆっくり、ゆっくりと・・・。
氷上を滑るフィギュアスケートのように、京本の身体の上を滑って

いく。

「ああ、もっと……、もっと強く力を入れてくれよ」

調理台の上で身体をよじり、じれったそうに京本は言った。

「こうかい？」

「もっとだよ」

「こうかい？」

「ああ、もっと……」

「こうかい？はぁ、はぁ…」

「ああ、もっと、もっと…、もっとだよ」

「こうかい？はぁ、はぁ…、はぁ、はぁ…」

「あっ、ああ…。だめだ！いけない！いけないよう。こんな中途半端な玩具の包丁じゃ、もうもの足りないよ。早く本物の立派な出刃でグサッと一気に胸倉に突き刺し、手っ取り早く腹わたをかき出してくれようっ！」

京本は自分の胸に爪を立て、掻きむしりながら、狂ったように叫んだ。

「はぁ、はぁ…、本番までにあまり傷はつけたくないんだ。品質が落ちてしまうよ。きみは大事な食材だからね。はぁ、はぁ…」

永井は鼻の穴を膨らませ、息を弾ませ、そして静かに言った。

本番では決して失敗は許されないと言う、永井料理長の練習台にされ、こうして京本は、何度も何度も永井の家のユニット式キッチンの調理台の上に全裸で仰向けにされ、身体を切り刻まれた。

刃物を持ち、狂喜した永井の顔を見るたびに、京本は至福の域に達した。

ふと、窓の方に視線をそらすと、白いものが無数に舞い下りていた。

「雪だ…」

京本が言った。

「ああ、初雪だ…」

永井が言った。

何度繰り返した事だろう。そしてこれから何度、同じ事を繰り返すのだろう。

その時がくるまで。

京本は調理台の上から、本格的に降り始めた雪を眺めて思った。

入会時に、きちんと内容を説明されないまま、入会したという事であれば、契約は取り消されるべきであるし、その証人にもなろう。
そう言う永井の申し出を京本はあえて断り、自らサクリファイになる道を選んだ。

ほんの3ヶ月前に、迷い込んでしまった禁断のラビリンス。出口はいくつもあった。しかし、そこで味わってしまった、毒入り果実のなんとも甘く狂おしい味に取り付かれてしまった京本は、もう元に戻ることはできなかった。
行き着く先に、牙を剥いた悪魔がどす黒い大きな口を開け、待ち構えていようとも、この先何十年かの京本の命と引き換えにされたとしても、惜しくはない。もう後戻りはできない。したくない。

電話に向かい、ひとり卑屈な笑いを浮かべ、お決まりの営業用のトーク・スクリプトを読み、玄関先で門前払いを喰らう野良犬のように、ガチャンと受話器を切られる屈辱的な日々の繰り返しは、もう遠い過去の話しだ。

自分は世に惜しまれる存在でも、世の役に立っている訳でもない。
俺が消えた所で悲しむ奴もなく、笑う奴もない、何もかわりはしないんだ。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす
驕れる者久しからず、ただ春の夜の夢の如し
猛き人もついに滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ・・・」

雪を見ながら永井がひとり呟いた。

今となっては、むしろ3ヶ月後が待ち遠しいくらいだ。こんなロールプレイだけではなく、丹念に研磨されたリアルな高級出刃包丁で、他の誰でもない京本が唯一師と仰ぐ、永井自身の腕で腹を裂かれたいのだ。永井もそれを望んでいるに違いない。
食べたい者と、食べられたい者同士の、究極の愛情表現だ。

京本は永井の推薦で、永井の大学に入学した。賞金の4千万円は入学金や授業料などにまわし、残りは大学の研究費にカンパした。

毎日の様に永井の授業に出席し、若い学生たちに混じり、永井の講義を熱心に聴講した。
授業が終わると永井のマンションに先に帰り、永井の為に食事の支度をした。
その為に料理学校にも通った。新婚の夫婦の様な楽しい日々が続いた。それは限りのある、儚い日々であった。

しかし、京本は自分がこれまで生きてきた、四十数年間で最高の充実感を味わうことができた。

そして月日は経ち、2月の末に京本に組織より召集がかかった。
寒風吹きすさぶ、寒い朝だった。

「私は一日遅れて準備に入るが、きみとこうして話せるのはこれが最後になる。何か言い残す言葉はないかい？」

永井は京本の両肩に手を置き、しっかりと眼を見据えて言った。
京本は何も答えず、ただ首を横に振った。
「もうすぐ、ぼくたちは本当に一つになれるんだ・・・そのための別れなんだよ」
そう言って永井は京本を強く抱きしめた。
永井の胸は熱くもなく、冷たくもなく、硬く、充分に陽を浴びた干草の匂いがした。
「そろそろ出発の時間です」
迎えの男が、感情のない乾いた声で言った。

組織　（8）

京本を乗せた車は、5ヶ月前と同じ仏具屋の前で停まった。
晩餐会の開かれたホールは、閑散としており、あの晩の煌びやかな賑わいは全く消え去っていた。只、だだっ広い地下壕が広がっていた。
ホールに繋がる廊下は迷路のように、幾つにも分岐していた。出迎えに現われた男は、地下通路を迷うことなく早足で突き進み、京本も歩調を合わせ黙々と歩いた。
そして、男は工場の倉庫にあるような古びたエレベーターの前で止まった。ドアが開いたままのエレベーターの中に乗り込むと、9階のボタンを押した。京本も従った。
降りた所は、診療所の待合室のような所だった。患者らしき人はひとりも見当たらなかった。
「それでは、着ている物をすべて脱いだらロッカーに入れ、この検

査着をつけてください。ブラジャー、パンツ、靴下も忘れずに。おっと、失礼。ブラジャーはつけていなかった。今回は雄だ。おっと失礼。まだ男性だ。検査着に着替えたら、このコップに尿を取って検査室の前でお待ちください」

淡々と説明する白衣を着た男の顔には、見覚えがあった。入会手続きの時に立ち会った男だ。男は宮崎と名乗った。

…まるで人間ドックのようだ。

京本は、検査用のコップに尿を溜めながら思った。

この後、自分はいったいどういうことになるのだろうか、様々な不安はあったが、決して肉体的苦痛は伴わない、と言う永井の言葉を京本は信じた。不安材料は、永井と同化できることの喜びで打ち消した。

待合室で検温をした後、身長、体重、血圧を計り、その後は胸部X線、血液検査、内科検診と、様々な検査を受けた。

「所見では特に異常なし」

聴診器を耳からはずし、宮崎は言った。

すべての検査が終わると、処置室で頭髪から陰毛に至るまで全身剃毛され、エタノール消毒を受けた。

その後、京本は小さな部屋に通された。

部屋の中はベッドと、むき出しの便器だけが備え付けられていた。

「検査着を脱いで下さい」

「えっ？」

「この部屋の中は全裸でも寒さを感じないよう、温度が調節されていますから衣類は必要ありません。と言いますか、あなたはここではもう衣類を身に付けることはできませんので、ご了承ください」

抵抗する余地はなかった。京本は仕方なく着ているものを脱ぎ、宮崎に手渡した。

「用事があるときは、ベッドに取り付けられたこのボタンを押してください。この部屋は２４時間監視体制下にありますから、何があってもすぐに監視員か駆けつけてきます。ご安心ください。検査はすべて済みましたので、しばらくすると食事が運ばれて来ます。それを食べたら、本日はお休みになった方がいいでしょう」

そう言って、宮崎は早々に部屋を出て行った。

ドアには５０センチ四方程の小窓が付いており、窓枠には鉄格子がはめられていた。それ以外に窓はなく、四面白い壁で覆われていた。

宮崎が出て行った後、ガチャガチャと金属音がしたので、京本は鍵を閉められたのだと納得した。

腹をくくって来たはずだったが、いざ閉じ込められてみると急に不安に襲われた。

しかし、不安に落ち込んでいる間もなく、すぐに眼鏡を掛けたひとりの女が、洗面器のような入れ物を抱えて部屋に入ってきた。

「お食事の時間ですよ」

女は容器を床に置いて言った。

容器の中を覗くと、黄色い粘土状のものが入っていた。

「食事って・・・これが、食事？」

「はい。すぐになれますから」

女はそう言って、洗面器を京本の前に差し出した。

見たところ、スプーンも何も付いていない。
京本が何も手をつけずにいると、女は言った。

「私は精神科医の中山と言います。これからあなたの精神的な部分をケアして行きますから、よろしくお願いします。さあ、遠慮なく召し上がってください。これはもろこしの粉と、脱脂粉乳を混ぜたものです。必要なビタミン、ミネラル類が含まれているので、食事はこれだけでＯＫです」

「スプーンか何か、貸してもらえないんですか？」

「それは出来ません」

「でも、それじゃ食べられないけど・・・」

「そうですか・・・。それでは、馬でも、牛でも、豚でもいいですから、家畜をイメージしてみてください。あ、失礼。今回は鶏でしたね。あなたは家畜ですから、四つん這いになり、手を使わずに食べる必要があります。できれば、鶏ですから両手は羽根をイメージしてください。さあ、遠慮なく召し上がれ」
中山は、しゃがみ込む京本の背中をなでながら、母親のようにやさしく言った。

「ほぅ～ら、いい子だからお食べなさい。コーコッコッコッコ・・・
ほぅ～ら、あなたはもう人間ではないのだから
なぁ～んにも、恥ずかしがることはないんですよう。
コーコッコッコッコ…。
ほぅ～ら、おりこさんだからいっぱい餌を食べようねえ。
ほぅ～ら、ほぅ～ら…。コーコッコッコッコ・・・」

精神科医だと言っていたが、この女こそ頭がイカレた精神病患者に違いない。京本はそう思った。しかし、女の母親のような心地良い声が、京本の意識をまどろませた。

気がつくと、京本は顔を皿の中に突っ込み、餌を鶏のように突っついていた。もろこしの粉は味気なく、美味しいものではなかったが全部食べきると、空腹感は治まった。

腹が満たされると、急に睡魔が襲ってきた。

中山が室内の明かりを消し部屋を出て行くと、京本はベッドの上に横たわった。そのまますぐに眠りに落ちて行った。

気が付くと朝だった。

窓はないので、擬似的な光りに違いなかったが、明るさと色で朝だと判断できた。

餌箱には既に餌が補充されていた。食欲はまったく沸いてこなかった。ベッドと便器だけの部屋で、やることなど何もなかった。

ベッドの上で仰向けになり、ぼんやり天井を眺めていると、永井の家の調理台の上の自分を思い出した。そして永井の事が思い浮かんだ。

永井は今日此処へ来るはずだ。永井と暮らしたほんの僅かな、甘く狂おしい日々が思い出された。出掛けに永井は、もう会うことはできないと言っていたが、京本は無性に永井に会いたくなった。

永井だって自分に会いたいに違いない。京本は、逃げ出したくなった。此処から逃げ出し、永井と二人で今まで通り、暮らせばいいではないか。京本はそう思った。

しかし、永井はそれを快く受け入れてくれるだろうか。

そんな事を考えている内に、ドアのカギが開けられた。
永井だ！京本は急いでベッドから跳び降りた。
しかし、満面に笑顔をたたえて、部屋の中に入ってきた中山医師の顔を見て、その場にへたり込んだ。

「あらあら、こっこちゃん。ご飯も食べずにメソメソしてたらダメじゃない。それに、昼間は起きていなきゃ。脂肪だらけでぶよぶよになっちゃうわよ。美味しいお肉になるには、沢山食べて、沢山運動しないとね。はい、お食べなさい。沢山食べて、誰にも負けない高級家禽になるのよ」

中山は、赤ん坊に言い聞かせるような優しい声で言ったが、その目は威圧的だった。

もう後戻りはできないのだ。
京本は、永井の狂喜に潤った美しい瞳を頭の中に思い描き、床の上に四つん這いになり、餌箱の中の餌をがむしゃらに突っついた。

「コーコッコッコ・・・」
鶏の鳴き声を真似てみた。

「あらっ！こっこちゃん。上手に鳴けたわね。えらい。えらいわね」
中山は嬉しそうな顔をして、京本の頭を撫でた。

「コーコッコッコッコ・・・コーコッコッコッコ・・・
コケーッコッコォ・・・コッコッ
コーコッコッコッコ・・・コーコッコッコッコ・・・
コケーッコッコォ・・・コッコッ・・」
京本は両手をバタバタさせ、顔を前後に動かし、部屋中を歩き回った。

「これなら思った以上に早く次の工程に進めるわ」
中山はカルテに何か書き込み、満足気な顔で出て行った。
中山が出て行った後も、京本は鶏の鳴き声を真似て、部屋中をグルグル歩き回った。

俺は鶏になるんだ。
鶏になるんだ。鶏になるんだ。鶏になるんだ。
鶏になるんだ。鶏になるんだ。鶏になるんだ。
鶏になる以外、道はないんだ。

「コーコッコッコッコ・・・コーコッコッコッコ・・・
コケーッコッコォ・・・コッコッ
コーコッコッコッコ・・・コーコッコッコッコ・・・
コケーッコッコ・コケーッコッコッコ・コッケーコッコォー」

京本の顔は、涙と汗ともろこし粉でグシャグシャになった。

翌朝、身体中尖ったもので引っ掻かれるような、激しい痛みで目が覚めた。
目を大きく開けてよく見ると、身体の上に何匹もの鶏が乗っかっていた。

「うわぁーっ！！」

京本は驚いて飛び起きた。
部屋の様子が変わっていた。ベッドと便器は取り払われ、部屋に

は一面に藁が敷き詰められていた。
京本は藁の上で寝ていたのだ。京本の周りを、何十匹もの鶏が、首を前後に動かし、所狭しと部屋の中を右往左往していた。
部屋中に、鶏の餌と糞尿の臭いが充満していた。まるで、鶏舎だった。

監視員を呼ぼうと思ったが、ベッドが取り払われた今、ベルを押そうにも
そのベルが見つからなかった。
仕方なく京本は、膝を抱える姿勢で、部屋の隅に縮込もりじっとしていた。何時間そうしていただろうか・・・。

ドアの小窓の扉が外側から開けられた。
「お目覚めですかぁ？こっこちゃん、ご機嫌はいかがですかぁ？」
中山が鉄柵越しに、笑顔で言った。

こんな状況下で、よくあんな笑顔で挨拶が出来たものだ。何の説明もなく、朝起きたらこの様だ！京本は急に腹立たしくなった。

ここから出してくれようっ！！
京本は声の限りに叫んだ。
しかし、京本の声帯から発せられた声は言葉にはならず、京本自身の耳に入ったのは
「ココ、コケーッツコッコッコッケコッコォー！！！」だった。
何度叫んでも、その声はコケコッコォーにしかならなかった。

「順調ね。その調子その調子」
中山はそれだけ言うと、にっこり笑って小窓の扉を閉めた。もう、ドアを開けて部屋の中には入ってこなかった。

餌箱は細長い物に変わっていて、壁の下側に開いた細い隙間から継ぎ足される仕組みなっていた。また反対側の壁からは、何本も細いチューブが突き出していて、数匹の鶏がそこから口伝で水を飲んでいた。

擬似的な朝の光りが差してくると鶏どもは鳴き、喰って、出して、眠る。

それの繰り返しだった。

最初は気味が悪いと思った鶏も、日にちが経つにつれ、それほどいやでもなくなってきた。糞尿も処かまわずひり出した。

京本は、日に日に確実に家禽化して行く自分を実感した。もっと早く完全な鶏になりたい。ここにいる全ての鶏の中で、一番立派な鶏になりたい。

そして、愛する永井の腕にかけられ、一刻も早く永井の胃袋に納まるのだ。永井もそのために、更に腕に磨きを掛けている筈だ。

沢山の鶏に囲まれていると、京本はその日が確実に近づいて来るのを強く実感できるのだった。

そして、ある朝ドアは開かれた。

組織　（9）

ドアがゆっくり、わずか数センチばかり開かれると、一本の青白い手がドアの隙間から現われた。青白い手は、おいでおいでと手招きしている。京本は誘われるように、その手の方向へ這って行った。

ドアに近づくと、いきなり首根っこを掴まれ、外に引きずり出された。そして、ドアはまたすぐに閉じられた。

「うっぷ、ひでえ臭いだ」
宮崎が白衣の袖で鼻を覆って言った。
京本の身体中には糞尿がこびり付き、悪臭を放っていた。
「吐きそうよ」
中山がハンカチで口元を覆い、顔をしかめた。
「早くやっちゃってくれよ」
「えっ？こんな所で？・・・」
「第１診察室は使用中だ」
「第２があるでしょ？」
「９時から一般外来患者の診療が始まる」
「診療時間まで、まだ少し時間があるわ。ほら！手伝って。一緒に運んでよ」

二人の会話が耳に入ってくる。しかし、いまや家禽化してしまった京本には言葉を聞くことができても、それは単なる音声に過ぎず、理解することができない。脳細胞に情報を伝達するシナプスがうまく働いていないのだ。
京本は全裸のまま、両手を宮崎と中山に片方づつ捕まれ、そのまま廊下を引きずられた。第１診察室の前を通ったとき、青い検査着を来た男と白衣を着た数人の男達とすれ違った。検査着の男が京本をじっと見下ろしていた。

京本は第２診察室に運ばれ、ビニールシートの敷かれた、診察台の上に仰向けにされた。
中山は不快な顔をあらわにし、京本の全身をくまなく観察した。
「消毒用エタノールと、それからオキナゾールも持ってきて」
近くにいた看護婦に命令口調で言い付けた。
「ちょっと待ってよ、中山先生。さっきも言ったけど、時間がないんだからさぁ、消毒はなしにしてよ」
宮崎が看護婦の動きを制するように言った。

中山は宮崎の顔を見ると、少し考える風な素振りを見せたが、すぐに京本の方へ向き直った。
その間、ベッドの上で仰向けになっていた京本は、小さな声でしきりにクーックークークー、クーックークークーと鳴き声をたてていた。

「ほぅら、コッコちゃん・・・じゃあ、今から先生が眼を覚ましてあげますからねえ・・・」
中山はそう言うと京本の目の前で両手を合わせ、一気にパンッ！と一回大きく手を叩いた。
「ほうら、眼が覚めていく」
そう言って、もう一度大きく手を叩いた。
「ほうら、どんどん眼が覚めていく」
パンッ！！今度は両手で、京本の頬を思い切りたたいた。

「いてっ！！」
「ほうら、眼が覚めた。はい、あなたのお名前は？」

「きょうもと、こうじ・・・」
「住所は？」
「杉並区荻窪・・」
「職業は？」
「テレフォンアポインター」
「好きなタイプは？」
「ゆうこりん」
「オッケイ。完璧よ」
それは、頭の中のフィルターが外れたような感覚でもあったし、夢から目覚めた時のような感覚でもあった。

「い、いったい、俺は・・・」

「心配しないで。あなたは今、鶏から人間に戻ったのよ。もう、何も心配ないわ」
「ということは・・・いよいよ、本番が始まるんですね」
京本は周囲を見回し、興奮気味に言った。
「・・・さぁ、起き上がって」
京本は言われるままに診察台の上に上半身を起こした。

「荷物はこれで全部だったね」
宮崎が見覚えのある、履き古しのジーンズやシャツなどを、京本の目の前に持ってきた。それは紛れもない、京本が此処へ来るときに着ていたものだった。
「着替えがすんだら帰っていいですからね」
「はぁ？」
京本には、宮崎の言った意味がすぐには理解できなかった。

「いやぁ、驚きましたよ」
宮崎はカルテを見ながら更に言った。
「検査の結果が出ましてね。まず肝炎検査の結果は、B型肝炎ポジティブ。HIVウィルス検査結果、ポジティブ。鳥インフルエンザ検査結果、ポジティブ。暁虫検査結果、ポジティブ。他にも、いんきん、たむし、白雲、うーん…今時珍しいな。これだけもってて、なんの重篤な症状も出ていないのが不思議なくらいだ。それぞれの病原菌が体内でけん制しあっているのかもしれない。核で抑止された、まやかしの平和ってところか・・・あはははは・・・」
「はぁ？」
「つまり、京本さん。あなたは食肉としてふさわしくないのですよ」
「はぁ…」
「着替えが済んだら、帰っていいですよ」
そう言うと、宮崎は机の方に向き直り、カルテに何やら書き込んだ。

後頭部を重たい砂袋で叩かれたような感覚だった。京本は何がなんだかわからず、診察台の上でただ呆然とした。そんな京本の頭に中山が無理やりアンダーシャツを被せた。
「急いで！今日は一般患者の診療日なの。患者さんがそろそろ見えるころだわ」
中山は京本にトランクスを渡し、まだ首にしか通っていないアンダーシャツの上からオーバーシャツを引っ掛けた。
そうして不恰好に着替えを済ますと、宮崎と二人で、足元のおぼつかない京本の腕を抱え、エレベーターに押し込んだ。
「あ、あの・・」
「ん？」
「本当に帰っていいんですか？」
「そういうこと！」
「じゃ、俺の身代わりは・・・」
「次に当たりくじを引いた人よ。今日もう既に準備に入ったわ。あなたの会員資格は消失しましたから、あとの事は何も心配しなくていいの。お疲れさま」
中山が言った。
「そう。何事も起こらなかった。全て忘れてください」
更に宮崎が念を押すように言った。
中山は、エレベーターの中に一歩足を踏み入れ１Ｆのボタンを押すと、すぐにまた外に出た。
「それでは、お大事に」
ドアが閉まる間際、ふたりはそう言って丁寧にお辞儀をした。

エレベーターが１階で停止すると、京本は無意識に外に出た。頭の中が空白だった。人々の群れが同方向に流れて行った。京本もまたその流れに乗った。一歩一歩、歩を進めるごとに記憶が溯っていった。半年前のあの日、仕事帰りの通勤電車の中で、あのふたりの

男たちの後をつけて行った日から、今日までの記憶が一気によみがえった。
生け贄としてさばかれる日を待つ、狂喜した陶酔の日々。この世に生を受けた瞬間から、誰もが嵌められる決して逃れることの出来ない死という名の枷鎖。首や腕、脚に巻きついたこの枷鎖を皮膚に喰い込ませ、血を滴らせその痛みに陶酔し、狂喜した。しかし今、京本の枷鎖は緩められた。

人の流れに沿って歩いて行くと駅に辿り着いた。京本はエスカレーターを昇り、切符を買い改札を抜け、ホームへ降りた。ホームの上は朝の通勤客でごった返していた。
俺は自由になったんだ。
誰に拘束されることもなく、取りあえず自分の意思通りに生きていけるのだ。また、あのかび臭い六畳一間のアパートへ戻ればいい。戻ってまたアルバイトの口を探し、一時間千円そこらの自給で働き、孤独で単調な日々を送ればいいのだ。そうして、このうじゃうじゃした集団の中に埋没していくのだ。喰って、出して、寝る。そういう事を、死ぬ時が来るまで繰り返す。それでいいじゃないか。

京本はホームに立ち大きく深呼吸を一つして、電車を待つ列の一番後ろに並んだ。
しかし、京本の脇を通り抜ける人々は皆、顔をしかめ距離をあけいく。
そのとき、京本の頭の中に、ある映像が思い浮かんだ。
廊下を引きずられて行く自分の無様な姿と、その自分を見下ろしていた青い検査着を着た男。催眠から覚めた今、その男の顔が鮮明に蘇った。
次のサクリファイは、二番目に当たりくじを引いた人間。つまり次の晩餐会の料理長。永井であった。
その事実を思い出した瞬間、京本は呆然とその場に立ち尽くした。

京本の頭の中に、もう何度も繰り返し覚えてしまった葉隠の聞書第一の章が鮮明に浮かんだ。京本は一句一句ゆっくりと、まぶたの裏側に描かれる文字の羅列を大声で読みあげた。

「武士道といふは、死ぬ事と見つけたり。二つ二つの場にて、早く死ぬほうに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわって進むなり。図に当たらぬは犬死などといふ事は、上方風の打ち上がりたる武道なるべし。二つ二つの場にて、図に当たることのわかることは、及ばざることなり。我人、生くる方がすきなり。多分すきの方に理が付くべし。若し図にはづれて生きたらば、腰抜けなり。この境危ふきなり。図にはづれて死にたらば、犬死気違なり。恥にはならず。これが武道に丈夫なり。毎朝毎夕、改めては死に改めては死に、常住死身になりて居る時は、武道に自由を得、一生越度なく、家職を仕果すべきなり。」
（葉隠　聞書第一）

京本の周りにできた空間がますます広がっていった。京本はもうこの空間を通り抜け、向こう側の集団の中に戻る事はできなかった。

2番線ご注意ください。特急列車が通過いたします。
駅のアナウンスが流れた。

「うわぁー！！」

京本は奇声を発し、ホームに入って来た列車に向かって突進した。

「荻窪〜　荻窪〜」
車内アナウンスのリズミカルな声で眼が覚め、周囲を見回すと乗客が皆自分に注目しているような気がした。
京本は急いで立ち上がり、閉まりかけるドアの方向に向かって走りだした。

「あっ！落ちましたよ」
降りる間際、ひとりの男が京本に文庫本を手渡した。

京本は軽く会釈して、本を受け取り、閉まりかけるドアの隙間から飛び降りた。

電車を降り、本を手にして京本は思った。

…ん？　今の男、確か・・・

後ろを振り返ると、電車はすでに発車した後だった。

―完―

あとがき

フランスの作家エルヴェ・ギベールは１９８８年エイズ感染を告知され、自らエイズ患者であることを公表した。
『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』、『憐れみの処方箋』、『召使と私』、『ヴァンサンに夢中』他、多数を刊行している。
脚本を手がけた『傷ついた男』は映画化されセザール賞を受賞している。
（１９８３年／フランス映画／監督：パトリス・シェロー　脚本：

エルヴェ・ギベール、パトリス・シェロー　撮影：レナード・ベルタ　キャスト：アンリ＝ジャン・ユーグ・アングラード、ジャン＝ヴィットリオ・メッツォジョルノ、ボスマン＝ロラン・ベルタン、エリザベト＝リサ・クロイツァー、アンリの父＝アルミン・ミュラー・シュタール）

エルヴェ・ギベールは１９９１年１２月、エイズによる衰弱死を待たずに、常備していたジギタリスを服用して自殺未遂、そのまま回復することなく１２月２７日他界した。

彼の作品『幻のイマージュ』の中の【初恋】で、彼は、父と観に行った「世にも奇妙な物語」というオムニバス映画に出演した俳優、テレンス・スタンプの映像（ひどく不吉な悪魔の映像）に恋をしたと書いている。スタンプの2枚のスチール写真を手に入れた彼は、…夜、とこに就くとき、ベッドの隅に身体をずらして、写真に写っている身体のために場所を空けてやり、ぼくはシーツの中で彼らに語りかける・・・

とある。

私が三島由紀夫の『仮面の告白』を読んだのは、ほとんどのギベールの作品を読んだ後（仮面の告白が刊行されたのは昭和２４年）だから、半世紀は経っていた。まず私が思い浮かべたのは、エルヴェ・ギベールだった。

三島は『仮面の告白』の中で、父親の外国土産の画集の中の、或る殉教図絵についてこう書いている。

…私は残り少なの或るページをひらいた。するとその一角から私のために、そこで私を待ちかまえていたとしか思われない一つの画像

が現れた。
ゼノアのパラッツォ・ロッソに所蔵されているグイド・レーニの「聖セバスチャン」であった。中略・・・
その絵を見た刹那、私の全存在は、或る異教的な歓喜に押しゆるがされた。私の血液は奔騰し、私の器官は憤怒の色をたたえた。この巨大な・張り裂けるばかりになった私の一部は、今までになく激しく私の行使を待って、私の無知をなじり、憤ろしく息づいていた。私の手はしらずしらず、誰にも教えられぬ動きをはじめた。私の内部から暗い輝かしいものの足早に攻め昇って来る気配が感じられた。云々・・・

三島の『潮騒』の英訳本はニューヨーク、クノップ社より刊行され、のちに多くの作品が各国で翻訳出版されている。
ギベールの作品の中に日本へ旅したことも、あまり好印象ではないが、ほんの僅かだが書かれているものがある。
彼の作品の中に、三島や日本文学について書かれたくだりは、一遍も見当たらないが（私の記憶する限り）ギベールが三島の作品に触れ、三島の影響を受けていたとしても不思議はない。

さて、その三島由紀夫であるが、三島が誰の影響を受けていたか、などということは、ここで私が延べるほど豊富な知識など持ち合わせていないのでやめておくが、例えば三島由紀夫のペンネームの生みの親であり、三島が生涯只一人の師と仰いだ国文学者（学習院生時代の恩師）への敬慕の情があふれる手紙９９通をまとめた『師・清水文男への手紙』の中で
…影響を受けた作家を年代順に並べますと
北原白秋、芥川龍之介、オスカア・ワイルド、谷崎潤一郎、レエモン・ラディゲ、ジェイムス・ジョイス、マルセル・プルウストと言う順で、詩では、北原白秋、月下の一群の詩人たち、アルチュール・ランボウ、中原中也ｅｔｃ．．．

などと、書いている。これは三島がまだ初々しい学習院生の頃であるから、この後三島の世界は更に様々な分野に拡がって行くのであろうが…。

また『川端康成・三島由紀夫往復書簡』川端康成と三島由紀夫の手紙のやりとりをまとめたこの書簡も中々興味深いものがある。

これは東大生の三島が自分の小説を川端に送ったことによって、2人の交流が始まったもので、一文学青年と一小説家としてのやりとりから始まり、最後は三島が自決の4ヶ月前に川端に宛てた手紙によって、2人の文通は終わりを告げることになる。

「小生が怖れるのは死ではなくて、死後の　家族の名誉です。・・・生きている自分が笑われるのは平気ですが、死後、子供たちが笑われるのは耐えられません。それを護って下さるのは川端さんだけだと・・・。」

小説からは分からない2人の素顔を見られる貴重な作品である。

『師・清水文男への手紙』では、最後の手紙は昭和45年11月17日で終わりになっている。これは三島の自決の一週間前である。

ここで、三島は最後になる著作『豊饒の海』の草稿が終われば、自分の世界も終わりになる。また堕落した日本を嘆く内容の手紙を書いている。

…「これでいいぢゃないか、結構ぢゃないか、かどを立てずに、まあまあ」そういうのが大人のやることで、日本中が大人になってしまひました。

と、30年間も手紙を書きつづけた恩師であったからこそ、自分の胸のうちを素直に吐き出している。

…武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり

また、三島はこの有名な句で知られた、『葉隠』（佐賀藩第二代の藩主鍋島光茂公に仕えた、山本常朝が武士としての心得（武士道）について個人的見解を述べ、その口述の元に田代陣基が筆録したもの）を座右の書とし、常に手放す事はなく、折にふれてはページを読み返していたという。

常朝は鍋島藩主光茂公の卒去に伴い、殉死の志に強くせめられた。しかし、殉死は寛文三年以来幕府によって厳禁されていたし、佐賀藩でもきびしいご法度になっていた。当時、殉死の志を満たす事は不可能だった。

常朝は、唯一殉死の志を満たし国禁にそむかない方法、世を遠ざかり出家する道を選んだ。

軟弱化していく世の風潮を嘆く常定の心境と、この三島の最後の手紙の中から推測できる彼の心境に、似通ったものを感じられるのはこの私だけではないだろう。

前出の句ではあまりにも有名だが、しかし実際のところ『葉隠』は死を美化するだけのものではなく、衆道（同性愛）の方法や、嫌な上司からの酒の誘いを丁寧に断る方法等、現代のビジネス書や恋愛本に近い記述もあり、一般に想像されている『武士道』とはかけ離れた内容の書物であったと云える。

実際のところ私も、京本同様『葉隠』読み途中であり、一生掛かっても読み解けるものかどうかは、まったく自信のないところであります。

が、しかし、これは三島自身が『葉隠入門』という本も書いているので、原文を読むより数段読み易く、興味ある人にはお勧めしたい一冊である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4343b/

組織

2010年10月21日22時14分発行